

すずらんの日

5月1日はすずらんの日です。

フランス語ですずらんを「ミュゲ (Muguet)」ということから「ミュゲの日」ともいいます。フランスでは5月1日に愛する人やお世話になっている人にすずらんを贈る習慣があり、もらった人には幸運が訪れるといわれます。

すずらんの日の歴史

すずらんには日本原産種（鈴蘭、君影草）とヨーロッパ原産種（ドイツスズラン）があります。鈴なりの花がつく植物はヨーロッパの人々の間で、春のシンボルであり、幸せを呼ぶものと考えられていました。特にすずらんは今でも「聖母マリアの涙」とも喻えられ、ヨーロッパで大切にされており、ブライダルに花嫁に贈る花としても有名です。

16世紀になるとヨーロッパでもすずらんの栽培が始まります。今日のようにスズランを贈るという風習は、シャルル9世が作ったと言われます。当時、5月1日は愛の日とされていました。葉と花でつくった冠をかぶったり、花をプレゼントしたりしました。1561年5月1日、幸福をもたらす花としてすずらんの花束を受け取ったシャルル9世はそれをお気に召し、それから宮廷のご婦人たちに毎年すずらんを贈ることにしたのです。すずらんは恋人たちの出会いの象徴でもありました。ヨーロッパでは「すずらん舞踏会」が開かれていました。この日、若い女性たちは白いド

レスを身にまとい、男性たちはボタン穴にすずらんを付けたそうです。

しかし一般の人々がすずらんを贈る風習は、19世紀末から徐々に進み、この習慣が定着したのは1976年5月1日だと言われています。20世紀になると、特にパリ近郊の人々が森にすずらんを探しに行く風習ができました。現在も5月1日が近づくと、街角ではすずらんの小さな花束が至るところで売られます。フランスでは当日になると、誰でもすずらんを売って良いのだそうです。ただしすずらんには森で摘んだもの（根がないもの）で、花店から100メートル以上離れた場所で売ることなどという規則があるそう。子供たちがお小遣い稼ぎにすずらんを売ることもあります。資金集めのために団体が売ったりもします。

売られるすずらんは数本の小さな花束で300円程度の値段がついています。花店では栽培されたすずらんも売られますが、パリなどのような大都会では森のすずらんは香りが高いこともあり希少価値が高いそうです。ちなみに、年間6,000万本のすずらん生産量のうち、85%はフランス西部のナント市がある温暖な地方で栽培されているそうです。

谷間のユリ

すずらんはユリ科スズラン属の多年草。鈴のように咲くためにこの名前がつけました。君影草（きみかげそう）という別名もあります。花言葉は「幸福が訪れる」「純潔」「純粋」「繊細」「幸福の再来」「意識しない美しさ」など。ちなみに、スズラン属という意味の Convallaria は、ラテン語の「convallis（谷）+ leirion（ユリ）」が語源で「谷間のユリ」という意味です。同様に英名は「Lily of the Valley（谷間のユリ）」です。

すずらんの伝説

すずらんにはこのような伝説もあります。森の守護神セント・レオナードが修行の為にかけた際、彼は森の中で道に迷ってしまいました。そこで一匹の大蛇に襲われてしまいます。その戦いは三日三晩続き、瀕死の重傷を負いながらセント・レオナードは大蛇を剣でうち倒すことが出来ました。しかし彼の負った傷も大きく、血だらけになり、草の上に倒れ込んでしまいます。そのとき、血で染まった大地から目にも鮮やかな白いすずらんの花が一斉に咲き始め、彼の身体の傷と、精神的な傷を癒し始めました。これは大蛇を退治してくれたセント・レオナードの為に森の精霊がすずらんを咲かせ、彼の傷を癒したのだといえます。このような伝説から、すずらんの花は癒し、平静、幸福を意味するようになったそうです。

香り

日本のお花屋さんで見かけるすずらんの多くはドイツ産のドイツスズランで、日本産のすずらんより花が大きく、香りが強いのが特徴です。バラ、ジャスミンとならんで、三大フローラルノートと呼ばれ、そのややグリーンを帯びた透明感のある香り、キリリと爽やかな香りから、いくつもすずらんの香水が出ているほどです。すずらんの香りを再現した香水の代表格は、クリスチャン・ディオールの「ディオリッシモ」。すずらんを特に好んだディオールが、生涯最後にプロデュースした名香とされています。また、スズランの香りは聖なる香りと言われ、好きな人にふりかけると自分に並びてくれるという言い伝えもあります。



スズランの香りは万能！
特にバラやスイートピー、
フリージアとピットリです

スズラン